

目次

脚本『新編楽座』語彙表に……

金田 一 三〇

近代語の進行態・既然態表現……………柳田 征司……………一

『宇治拾遺物語』（流布本）のよみ……………櫻井 光昭……………元

室町時代における「こそ」の係り結び……………坂詰 力治……………五

言語資料としての天理本『狂言六義』……………小林 賢次……………七

——ゴザアル・ゴザル、マラスル・マスル、サラバ・ソレナラバの分布から——

抄物における「何ノ用ゾ」……………小林 千草……………一〇

近松世話浄瑠璃の心話文……………阿部 八郎……………一三

近世に見られる形容詞の分類……………鈴木丹士郎……………一六

『誹諧通言』寸見……………杉本つとむ……………二〇

近世における訓の関係……………大橋 紀子……………二五

——すい・いき・つう・しやれの場合——

大橋 紀子……………二五

一九の文字生活……………矢野 準……………三〇

—— 葛屋板黄表紙五種の仮名表記の実態を中心に——

式亭三馬の文体——基調としての語句——……………斯林不二彦……………三二

永代節用無尽蔵について……………宇野 義方……………三三

共通語とその変容——思考と表現の観点から——……………森岡 健二……………三〇

感情形容詞の連用修飾用法について……………細川 英雄……………三三

「始発」…「終発」……………天沼 寧……………三四

地名の近代語……………鏡味 明克……………三一

日馬語のシンドロム……………吉町 義雄……………三九

明治初年の洋学会話書における

助動詞「です」とその用法……………松村 明……………三五

咄本『珍話楽牽頭』語彙索引……………金田 弘……………四〇(左一)

……………鶴橋 俊宏……………四〇(左一)

執筆者略歴…………………………四〇

近代語の進行態・既然態表現

柳 田 征 司

のである。

「ゴザナイ」と「ゴザラス」

次に、「ゴザアル」に対応する否定形式「ゴザナイ」と、「ゴザル」の未然形用法の一つである「ゴザラス」(表1)には内数で表示)の使用状況を見よう。天理本全体では、「ゴザナイ」一七例に対して「ゴザラス」一二六例と、「ゴザラス」の形をとることが圧倒的に多い。特に、「ゴザアル」を比較的多用する〔上I〕〔上II〕においても「ゴザナイ」七例対「ゴザラス」二九例と、「ゴザラス」が優勢になっている点は、大倉氏も注意しているように(注5所掲論文)、いささか問題となるところである。

先に拙稿で示したように、「ゴザアル」を多用する虎清本では否定形式は「ゴザナイ」専用であり、虎明本の場合、「ゴザナイ」と「ゴザラス」とが伯仲している。また、『天草本平家物語』や『天草本伊曾保物語』でも、肯定形はほとんど「ゴザル」の段階に至っていないながら、否定形式としては「ゴザナイ」を多用しているのである。<sup>(12)</sup>

天理本の場合、特に上巻の途中まで「ゴザアル」をかなり多用しながら、「ゴザナイ」をあまり用いず、「ゴザラス」を主としている点で、やや特異な性格を持っているようである。しかし、「ゴザル」が発達した段階で、「ゴザラス」の形が用いられるのは当然のことであり、近世の初期、天理本や虎明本などの筆録当時においては、「ゴザラス」が一般的で、「ゴザナイ」はかなり古めかしく、あらたまった形式となっていたことであろう(候文体のものにおいては、「御座なく候」ともっぱら「ゴザナイ」が用いられる)。「ゴザル」に対する「ゴザアル」の使用は、語形の相違がさほど目立たないが、「ゴザナイ」の使用はかなり強い印象を与えることになる。虎明本(さらには虎清本)の方が、むしろ意図的に古い表現形式「ゴザナイ」を多用しているのだと言えそうである。

用法に関しては、「ゴザラス」が、尊敬語としても、また、丁重語・丁寧語としても広く用いられているのに対し、「ゴザナイ」は、丁重語または丁寧語として、特に、事物が存在しないという丁重語の用法に限られる傾向がある。この点、「上III」以降の「ゴザアル」の用法と共通している。ただし、共通の用法に関する限り、「ゴザナイ」と「ゴザラス」とは、この「ゴザアル」の場合、「ゴザアル」の場合と同様、敬意の差などによって使い分けられた形跡は見出しがたい。なお、

⑩してへそれがしへ、うたひなどへ、うたふた事へ、御ざなひト云……してへ是へ、めいわくで御ざる、いかに御意でも、うたふた事へ、御ざらぬト云(寝音曲、上六十八108オ) 太郎冠者↓主

のように併用されていることも多い。「ゴザアル」と「ゴザル」の場合と同様、敬意の差などによって使い分けられた形跡は見出しがたい。なお、

⑪サンへ土性金ヲ云テ、生類の内でも人ては御さらぬかト云(いくる、下百一214ウ) 算置↓亭主  
の場合、たまたま「拔書」中にもせりふが記されているが、ここでは、

とあって注意される。右のせりふを書き留めるにあたって、上巻の本文中では通常の「ゴザラス」を用いていたのに対して、「拔書」中においては、おそらくややあらたまった意識で「ゴザナイ」を用いたものであろう(「内でも」と「内にも」の異同も文体的な相違を物語る)。「ゴザナイ」と「ゴザラス」のようにほぼ同義の表現形式が共存する場合、そのいずれを選択するかは、筆録者の判断によるところが大きかったことをうかがわせるものである。

この「ゴザナイ」と「ゴザラス」に関しては、もともと上巻の最初から当代語としての「ゴザラス」を多く取り入れていたため、執筆が進んだのちも、特にその傾向に変動は生じなかったであろう。

オリヤル・オチャル・オリナイ

次に、「ゴザアル」「ゴザル」等に関連する敬語として、ここで「オリヤル」「オチャル」「オリナイ」の分布について